

2003年 カンボジア総選挙 監視活動参加レポート

門倉若菜(埼玉大学教養学部国際関係論コース)

1. カンボジアとの出会いから今回の監視活動まで

最初に今回の監視活動への参加の動機についてお話ししたいと思います。(論文調で文章を書くのが苦手な為、エッセイ調になるのをお許し頂きたい。)地元の相模原市にインドシナ難民として日本に来たカンボジア人の友人が多くいる影響で、これまでに既に2度もカンボジアに行く機会に恵まれた。この2回の訪問を通じて「発展途上国の開発協力を携わりたい」という以前から持ち続けてきた思いを強くし、この国の発展の一助を担えるような人物になりたいと、開発協力を学ぶ為に勤めていた企業を退職し埼玉大学の3年に入学し直した。そこでインターバンド副代表の山田教授と知り合い、今回の選挙監視ミッションについて知ることとなった。

山田教授から最初に「選挙監視を実施する」と聞いた際に、以前読んだ『国連ボランティアを目指す人へーカンボジアでの経験から』という本のことを思い出した。この本は93年の総選挙後に書かれたものだが、それを読んだ私は「選挙監視というのは国連ボランティアの人達のような専門性のある人物にしか出来ない」と思っていた為、私のような一介の大学生でもできると知った時には、この意義深い活動に参加できることの喜びと同時に、積極性を持ち独自の活動を展開するインターバンドのようなNGOの存在に「市民社会時代」の息吹を感じた。

私自身、世界を広く知り、社会で役立とうと志す者として「政治やそれを行う者を選ぶ選挙の重要性」を頭ではわかっているつもりだったが、実のところ殆どこれらに興味がなかった。自ら投票所に足を運び、票を投じた経験は数える程しかない上に、小さな一票が実際の政治に反映されているという実感をこれまで持つことはなかったからである。しかし今回の監視活動を通して、政治や選挙の重要性、そしてそれらが社会に与える影響を目の当たりにし、有権者・社会の一員として、自分の属する日本の国家・地方自治体の政治について鑑みる必要性を切に感じているところである。

発展途上国においては特に、政治の安定は国の安定に直接つながる。今回の選挙ではカンボジア人民党(CPP)が負けた場合、クーデターが起き内戦状態に陥るのではないかとこの懸念が人々の間に存在していたものの、当初から「CPPが圧勝するだろう」との見方が有力であった。一方で現政権を真っ向から批判し民主主義・人権を掲げ、都市を中心とした知識人や若者の支持を得ているサム・レンシー党(SRP)の結果が前回に引き続き注目を集めていた。私の周りでも、日本に住み祖国の発展を願うカンボジア人の知人や留学生の多くがSRPを支持していた為、一体どのような結果になるのか個人的な興味は強かったが、監視員としての中立的な立場を忘れず冷静に行方を見守っていた。

言うまでもなくこの選挙の主役はカンボジアの人々であり、監視員はそれを陰でサポートする役割を担うのみであるが、その活動で体験した出来事を以下に纏めたいと思う。

2. 選挙監視活動

私、世一、櫻井、高瀬、高原、田辺の大学生6名は山田教授の指導の下、阪口チームと共にコンポンスプー州での活動を行った。同州はインターバンドの除隊兵士支援活動を行っている地域で、ANFRELの運営本部があるプノンペンから20KM程の距離にある為、それらの利点を活かした活動を展開することができた。私の属する山田チームは中国系縫製工場の多いチェバモン地区 (Cherbamong District) の4コミュニティ (VoaSa, Cherbamong, Kam Dul Dom, Roka Thom) において全部で9つの投票所を回った。同地域の縫製工場では労働条件に問題が多く、(1)SRPがストライキを働きかけていることで投票結果に影響があるか、また(2)労働条件を改善した場合、労働賃金の上昇に伴い海外投資のメリットが薄れる為に改善はないのではないか、という点について私達は注目していた。阪口チームの訪れた地域に関する内容は同チームの報告に任せるが、私達の訪れた投票所の1つはベトナム人の多い地域があり、彼らがクメール文字を読めないことで問題が発生しないか等も併せて観察していた。

コンポンスプー州チームは活動期間中において、インターバンド事務局で阪口・山田両チームの合同ミーティングを行い、相互に情報交換しながらそれぞれの活動を進めていった。期間中に訪れたのは、COMFREL オフィス、州選挙管理委員会 (PEC)、州の第三副知事、障害者支援を行うローカル NGO である。また国内人権団体 LICADHO (Cambodian League for the Promotion and Defense of Human Rights) のオフィスでは、同じ州内で活動を展開する Asian Foundation や EU、NICFEC (Neutral Impartial Committee For Free Election in Cambodia) との合同ミーティングにも参加し、この選挙が世界中から「見守られている」のだという事実を再認識した。

またインターバンドが支援する除隊兵士の家庭にも何軒か訪れ、彼らの生活や今回の選挙に対してのインタビューを行った。この国・この州では人々はどのような生活を営み、どのような望みを持っているのか等々、有権者である彼らに直接話を聞けるというのは日頃からの支援を通しての人間関係が築かれているお陰であり、非常に貴重であった。彼らのうち数人は仕事が多忙の為、投票に行っておらず、日々の生活に追われる姿が垣間見られた。その他には私達が家庭を訪問している時に、同じく家庭訪問をしていると見える政党のTシャツを着た人々に数人出くわしたが、彼らが何故来ているのかはわからなかった。

プノンペンでは爆弾騒ぎがあったが、私達のチームが監視した先では、不正やトラブルにほとんど全く出くわすことはなかった。「不正」として敢えて一つだけ例を挙げれば、コンポンスプー州で有力であると言われている4政党のうちの1つであるインドラブッダラシティー政党のある有力者が、投票日に私達のいた投票所に訪れた際、地元の「顔利き」らしく、入り口の人だかりを掻き分けてチーフに一言声をかけ、彼は優遇措置を受けて投票したことのみである。他に気になった点と言えば、各投票所の事務作業の手際・効率の悪さ、チーフの訓練不足からくる投票所の環境の相違、機密性の問題などであり、特筆すべき政治的な動機による不正行為はなかったと言える。

開票日は投票日同様手際が悪く、私が見た開票作業に至っては1票の誤差が生じた為に、夕方4時半を過ぎても作業は終わらなかった。チーフ1人が休みなしに何千もの票を読み上げる作業について、2人交替制を取る等の措置が有効だろうというのが私達の一致する意見である。今日は私達の実質的な活動採集日であった為、早めに作業を終えた他の作業部屋にいたメンバーは、今までの反省を活かして自発的にインタビューする等の積極的な行動をとれるようになっていた。

開票の結果は予想されていた結果通り CPP の圧勝で、セクレタリーが壁に(日本語だと)「正」の字を書いていた用紙の CPP の欄だけが床にまで達していた。次に票が多かったのがフンシンベック党(FUN)、SRP の順で、残りはどこも数える程であった為、先程指摘した顔利きの政党党員の影響は全くといってなかったようだ。また、縫製工場の地域においても結果は同様で、SRP の行動は票には結びつかなかった様子だ。

ANFREL の一部を除く全員がプノンペンに戻ってからのディブリーフィングでは、各地から報告された不正に驚いたと同時に、皆が無事に戻ったことを互いに歓迎し合った。我がコンボンスプー・山田チームからは、田辺さんが英語で堂々と私達の活動を報告してくれた。

3. 感想

冒頭に書いたように「一介の大学生でも参加できる」と喜び勇んで出かけて行った先では、カンボジア語と英語の嵐が待ち受けていた。カンボジア語は今年の春から自主的に学校へ通って勉強し始めたのだが、大学が忙しくて授業には殆ど出席できず、基礎も身につかないまま出発となり、事前研修で習った簡単な会話が出来る程度にしかならなかった。しかし、下手なカンボジア語でも使えば現地の人々は皆喜んでくれた。このようなコミュニケーションは、こちらの「話したい」という意識無しには成り立たない。そして話せば話すほど、もっと色々な話ができたら、という気持ちに拍車がかかる。

それから英語は高校の頃から殆どレベルアップしていないのではないかと自信は全くなかった。しかし聞き取れないながらも耳に意識を集中し、睡魔に負けず出来る限りメモを沢山取り、理解に努めた。少しでも早く他の参加者の方々のように、自分の力で英語を使って世界中の人々と一緒に仕事がしたい、それが現にできる方々への憧れと、そうではない自分の力不足に悔しさを覚え、これからやらなくてはならない様々なことが次々に頭に浮かんだ。特に、私達のチームの通訳であるナリット氏の努力には驚かされた。彼は何と一度も海外に行ったことがないのにも関わらず2年間で英語をマスターし、経験は浅くとも、今までのところ通訳の仕事で成功を収めているのである。アンコール・ワットのガイドや物売りの人々もそうだが、生活がかかっているやる気があれば外国語を学ぶことなど容易いのだ。環境が整っていてもできない私が何を言っても言い訳にしか聞こえない。

私は彼らカンボジア人のハングリー精神を尊敬し、根っからのフレンドリーさに親しみを覚え、やがてカンボジアは愛してやまない国となった。その為、監視員として国の大事な選挙に関われたのは本当に願ってもみないことである。監視員として役にたてたことよりも、逆に学ばせてもらうことのほうが数多くあったように思う。

今回のインターバンドの募集には、専門家以外にも私のような「将来国際協力に関わりたい人」も含まれており、私の感覚では「(今のところ)役立たず」に近い大学生も足蹴にせず歓迎し、共に活動し指導してくれた各国の監視団の皆様には大きな感謝の念を抱いています。これを読む方々や、そうでない方々に対してもお礼を言いたいです。「本当に有難うございました。」事務局の阪口さん、清水さん、安藤さん、岡田さん、大変お疲れ様でした。頼もしいサポートを有難うございました。そして共に活動した大学生の皆さん、一緒に色々な経験ができた喜びで一杯です。これからも仲良くお互いに励まし合いながら大きく立派に成長していきましょう！最後に山田先生、今後共ご指導を宜しくお願い致します。